

自治労宮若市職員労働組合は、地域活性化と宮若市のPRを目的に「みやわかパンまつり」を開催しています。主催するにあたって、運営ノウハウや出店者確保など多くの課題に直面しましたが、地域住民や事業者との「繋がり」を活かして乗り越え、今では宮若市を代表するイベントへと成長しました。イベントでは小学生の販売員体験や復興支援活動などを通じて新たな交流も生まれ、組合員同士の連携や職場環境の向上にも繋がりました。地域と人を結ぶ組合活動の可能性を示した自治研活動について提言します。

みやわかパンまつり — パンで繋がる人とまち —

福岡県本部／宮若市職員労働組合 山内 裕喜

1. はじめに

「おいしいパンはいかがですか？」

秋になると、宮若市のとある施設の中から子どもたちの元気な声が聞こえてきます。

宮若市は、福岡県の筑豊地域、福岡市と北九州市のほぼ中央にある人口25,000人余りの小さな市であり、この宮若市役所で働く職員で構成される自治労宮若市職員労働組合（以下、「市職労」）では、毎年秋に「みやわかパンまつり」と名を打ち、市内外から50店を超えるパン屋さんと10軒以上のキッチンカーに出店いただき大イベントを開催しています。先ほどの子どもたちの声は、このイベントで販売員体験をしている小学生の子どもたちの声です。

本レポートでは、市職労が組合員の自治研活動のひとつとしてなぜこのようなイベントを行い、この活動が地域と市職労との繋がりにどのように影響しているかについて記します。



2. 開催の経緯

冒頭に述べたように、宮若市の人口規模は福岡県内の市では小さく、トヨタ自動車九州株式会社をはじめとする自動車産業などの製造業や農業が主な産業となります。最近では、トリアルホールディングスと連携協定を結び、様々なAI開発拠点が整備されるなど、先進的なまちづくりを進める動きもあります。また、市の西部に脇田温泉という地域がありながらも、観光などにおける交流人口はさほど大きくはありませんが、自動車産業に関わる従業員の影響で昼夜間人口差は県内でも屈指のまちです。

市外の人からの宮若市のイメージは、“自動車産業が盛ん” “高速のインターがある” くらいだと推察され、このような自治体で働く市職労の組合員には、もっと宮若市を知ってもらうために「地域の活性化」や「市のPR」が必要だと考える職員が少なからずいました。当時の市職労の執行委員長もそのうちのひとりでありました。

当時の執行委員長は、「繋がり」という言葉を第一に、組合員間や市民、市内企業に留まらず広域にアンテナを張り、地域の活性化や市勢の隆盛に対するニーズの把握を常に行い、市主催のイベントや市内でのイベントには市職労として積極的に参加を行ってきました。2019年にその市主催のイベントである「リコリス子どもまつり」の中で行った「みやわかマルシェ&ちょっくらパンまつり」が現

在の「みやわかパンまつり」の第1回目の開催であり、このときは、市職労組合事務所内での定期的なパン販売に協力をいただいていたお店や宮若市近郊のベーカリーなど合計12店舗に協力をいただき、組合員と協働でパンを販売する形を取り、わずかな時間で完売をしました。この時の経験を経て、市職労で単独でのパンまつりを開催する機運が高まり、以降の開催に繋がっていきました。

3. 単独開催の試練

2019年の第1回目の開催からその後2年間は新型コロナウイルスの流行による様々な制限によってイベント自体の開催を断念してきましたが、2022年に初めて「みやわかパンまつり」を単独開催することを決め、開催の数ヶ月前から準備を始めました。市職労の執行委員が実行委員会のメンバーとして様々な検討を行いました。イベントの運営方法そのものから、出店者募集、ポスターやフライヤーの作成、会場の確保、必要人員の確保や配置など、いち自治体職員である市職労の組合員には、このようなイベントを単独で行うノウハウはなく、何からどう手を付けたら良いのか手探りの状態でした。会場の手配は、市の施設を借りることができましたが、施設内のテーブルやイス、屋外用のテントなどの設備は明らかに不足していました。出店者の募集は、組合員が普段利用しているお店や地域の店舗に実際に足を運び、片端から依頼を行いました。早く出店を承諾してくれる店舗もあれば、開催実績のないイベントに出店することは不安が大きい、と断られることも多く、全く実績のない我々が行うイベントへの警戒心が当然のように強かったことを実感しました。そのような状況を目の当たりにするたびに、私たち実行委員の気持ちは一喜一憂していました。

4. これまでの「繋がり」

前述したように、多くの課題を残したまま開催日当日が近づく中、市職労がイベントを計画しているが、テーブルやイス、外部テントなどが不足しているという情報を耳にした市商工会議所や市内の個人、団体からそれぞれが所有している備品の利用について協力いただける話をいただきました。また、近隣で行われる類似のイベントの見学や運営者に話を聞ける機会なども取り付け、ひとつひとつの課題が整理されていきました。これらの転機は、当時の執行委員長が様々なイベントなどで築いてきた人や団体との「繋がり」がもたらした好事であったと感じました。このように様々な課題が好転するなか、出店者の募集についても一度断られたからといって、それ以降足を運ばないのではなく、それでも足を運び、粘り強く交渉を行った結果、出店を承諾してくれる店舗もでてくるなど、最終的には73店舗に声掛けを行い34店舗に協力をいただける結果となりました。この繋がり、現在も多く店舗と継続しており、毎年出店いただける店舗や他のイベントで協力をいただけるような繋がりとなりました。広報についても、自前で作成したポスターを市内の飲食店やスーパー、コンビニなどに組合員が直接持参し掲示依頼を行うだけでなく、地域のフリーペーパーや新聞などもこれまでの繋がりの中から記事にさせていただくことができました。これまでの小さな「繋がり」ひとつひとつがイベント成功への追い風となっていることを感じました。

さらに、来場者に「少しでも楽しんでもらいたい」「宮若市をもっと知ってもらいたい」という思いから、パンの販売だけではなく、宮若市の特産品のブースや近郊で活躍するキッチンカーにも声をかけ出店いただけることになりました。このキッチンカーへの出店依頼も近郊で目撃した店舗へ直接問い合わせを行う飛び込みの形ではじめ、当初はうまくいかずに多くの店舗に断られていましたが、出店の承諾をいただいた店舗から他の店舗を紹介いただける形で、最終的には8台もの店舗に出店いただけることとなりました。各出店者との打ち合わせも、申込受付 → 詳細打ち合



わせ → 出店料受領などあえて、複数回対面で行うことにより、少しずつ「繋がり」を強くするよう信頼関係の構築を行いました。

このころには、専用のInstagramを開設し毎日情報を投稿。出店者情報も自分たちのオリジナルの言葉で紹介しました。また、Instagramのメッセージ機能を使い、多くの問い合わせが直接寄せられるようになり、組合員も何とかやりきらねばならないという気持ちの高ぶりが見られました。それでも、単独開催のイベントであることから集客への不安は最後まで拭えませんでした。

5. 本番、成果と課題

2022年11月19日のイベント当日が土曜日であったため、実行委員を務める組合役員と一部の組合員は前日金曜日の午後に休暇を取り、会場の設営に当たりました。総勢20名を超える組合員が職場で休暇を取っている状況にも関わらず、同部署の人は迷惑がる人もなく、業務の調整を行い、準備に協力的であり、組合員のみならず管理職にもこのイベントに対する期待値の高さを感じた瞬間でした。備品の提供をいただいた商工会議所や他の団体の方にも協力いただきながらの準備は夕刻7時を過ぎていました。

パンまつり当日は曇空でした。前日にある程度の会場設営は終えていたとはいえ、10時の開場に向けて組合員の集合は朝7時となり、宮若市職労ユース部員を核に女性部、壮年部の各機関に協力をいただき、50名を超える組合員がボランティアスタッフとして参加しました。

開場まで2時間となった午前8時を過ぎるころには、既に数十人の列が作られはじめ、開場時間の午前10時には200mを超える長い行列となり、会場への入場制限が必要な状況となりました。

しかしながら、この状況を喜んでばかりもいられない状況となりました。会場周辺で300台以上の駐車場の確保をしましたが想定を超える来場者の影響で、すぐに不足となり周辺の道路では駐車場を待つ車による交通渋滞や路上駐車が発生。また、会場入場の列へ長時間並ぶこととなり、「どれくらい待つのか」という問い合わせも多数ありました。会場内でも、人気の店舗への整理がうまくいかず混乱が生じ、来場者同士のトラブルや店舗間でのトラブルも発生し、慣れないながらも私たち組合員で懸命に対応しました。中には開場からわずか1時間ほどで完売をする店舗もあり、それらの店舗を目的に来場した方への周知をうまく行うことができずに様々なご意見をいただく状況もありました。

このような様々な課題がありながらも、来場者の多くは「宮若市でこんなイベントが開催されるなんて素晴らしい」、「また、来年も楽しみにしている」という開催を喜ぶ声が多く聞かれました。



多くの来場者で埋まった会場

6. イベントの枠を超えて

このパンまつりの開催に合わせて、市職労では新たな2つの取組みを行いました。

まず、1つは「北九州市旦過市場の復興支援」です。この時、北九州市の旦過市場は2022年4月と8月に2度にわたって大規模火災が発生し、復興に向けて多くの人が尽力している状況でした。これらの活動を少しでも応援をしようとこれまでも市職労では、組合員へ義援金の協力を求めることや旦過市場の商品を取り扱う物販などの活動により支援を行っていましたが、改めて特設ブースを設け、旦過市場の名物を集めて販



北九州市の特産品を並べた旦過市場の特設ブース

売を行い、来場者へ支援を呼びかけました。

そして、もう1つの取組みは「小学生の販売員体験」です。市教育委員会へ後援をいただいたこともあり、コロナ禍で様々な制限がかかる中、子どもたちに販売体験を通じて、就業や食育への意識を高めてほしい、そしてイベントそのものを楽しんでほしいという思いから、市内小学校と市職労の家族に参加を呼びかけ当日の販売スタッフのお手伝いを募集しました。80名を超える応募があり、当日の子どもたちは冒頭に述べたように元気な声でこのパンまつりを盛り上げてくれました。

2～3人1組で各店舗に入り、パンの説明や商品の袋詰め、受け渡しを体験し、各店舗からはお手伝いの御礼として子どもたちがお手伝いをを行った店舗から御礼のパンが配られるなど貴重な体験になったと思います。

この取組みは、参加した子どもたちから「楽しかった！また、やりたい」と喜びの声が上がったのはもちろんのこと、保護者からも「貴重な経験をさせていただきありがとうございます」というような感謝の言葉をいただきました。出店者からも、「子どもたちのおかげで、お客様がたくさん来てくれたし、何よりかわいい笑顔に癒されました」という言葉をいただきました。さらには、イベントの後日に販売体験を行った店舗へ、改めて子どもと保護者が来店するなど新たな「繋がり」のきっかけづくりにもなりました。

コロナ禍における制限がある中で、参加する子どもたちの調整など大変なことも多く、一時はこの取組みの中止も検討されましたが、実施してよかったと思える取組みの1つとなりました。この取組みは現在も継続され、去年は100名を超える子どもたちがこの販売員体験に参加してくれました。



楽しそうに接客をする販売体験の小学生たち



出店者のお手伝いをする組合員

7. 自治研活動の可能性

このように、様々な成功と失敗を経験しながら行った2022年のパンまつりから毎年実施をしているこのイベントは、今では宮若市職労が行うイベントという枠を超え、宮若市を代表するイベントの1つとして定着しつつあります。天候などによる来場者の増減はありますが、この「繋がり」から生まれたイベントへの出店店舗は今では50店舗以上になり、6,000人を超える人が集まるようになりました。2023年の開催時には、市内にある県立高校から高校の文化祭とコラボレーション（繋がり）していただきたいと依頼を受け、「ミニパンまつり」と題し、本会場と高校の会場の2つの会場で同時開催を行いました。両会場間の距離は約4kmありましたが、両会場のシャ



コラボ製作のパンを販売する高校生たち

トルバス移動を市内の観光バスを運行する会社が無償で行ってくださり、多くの人に両方のイベントを楽しんでもらうことができました。この高校生との繋がりは今も継続しており、高校生が当日ボラ

ンティアとして会場を手伝い、市内の店舗と高校生が共同制作したパンの販売を行っています。

この「みやわかパンまつり」のテーマは、「繋がり」です。宮若市、来場者、出店者、子どもたち、協力いただいた市内外の団体の方、そして私たち宮若市職労、ひとつひとつの出会いと繋がりがやがて輪になり、笑顔が伝わって広がることを願う思いで実施しました。宮若市職労のこの活動は、「繋がり」を常に大切にしており、執行部だけでなく組合員も一丸となって取り組み、また違う形で繋がりを広げています。組合の活動の最大の利点は「1人じゃない」ということです。「困っている人を助けたい」「地域のために力になりたい」と思う一人ひとりの小さな気持ちが繋がり、仲間と話すことでひとりでは思いつくことができなかった発想や方法が生まれるのだと感じました。組合という組織があるからこそ繋がりが生まれ、実現できることが私たちの何よりの強みであり、喜びとなり、いつしか大きな繋がりとなります。

「みやわかパンまつり」には休日を返上し、昨年は80名を超える組合員が手弁当でボランティアスタッフとして参加しました。また、当日参加してくれた参加者だけではなく、事前の準備や前日準備のために休暇を快く承諾してくれた同僚や上司、団体や個人など想像を超える人との繋がりにより実現しました。

職員組合とはよく、「労働条件の改善だけを目標としている団体」と思われがちですが、この活動は、若手の組合員だけでなくこれまで職員組合という組織に対しマイナスイメージを持っていた人に対しても、市民やこの市を訪れる人に対して喜ばれる活動、市のイメージアップとなる活動であると感じています。

このイベントの当初の目的は、「地域の活性化」や「市のPR」でした。しかしこの目的達成をひとつの過程として、業務では関わりのないユース部員と壮年部員が世代を超え交流が行えただけでなく、業務の中でより高い公共サービスを提供するための意見の交換、業務の改善などの情報共有が容易な職場環境の整備へと繋がったと感じます。私たちが主催するこの「みやわかパンまつり」はパン販売をメインとしたイベントですが、大切なのは組合員が一丸となって一つのことに取り組むことにより、そこに熱い想いが生まれ、繋がりが生まれ、感動が生まれるということ。組合という組織が地域と人を繋ぐ役割を担うという、私たちにとってもかけがえのない体験をもたらしてくれたということは何よりの宝物だと感じています。

今年の開催に向けて、これから大変な準備がはじまりますが、私たちは「繋がり」という言葉で常に前進していきたいと思います。

8. これからのまちづくりに向けて

人口減少や少子高齢化が進む中、多くの地方自治体では地域コミュニティの希薄化や担い手不足が課題となっています。宮若市においても例外ではなく、これからのまちづくりには行政だけではなく、市民や事業者、学校、各種団体など多様な主体が連携し、それぞれの強みを活かしながら地域課題の解決に取り組むことが求められています。

「みやわかパンまつり」は、一つのイベントではありますが、その過程で生まれた多くの出会いと繋がりは、まさにこれからの地域づくりの原点であると感じています。パンを通じて出店者と来場者が出会い、子どもたちが地域の仕事に触れ、高校生や企業、団体が協力し合う。その一つひとつの繋がりが新たな交流を生み、地域への愛着や誇りを育てるきっかけとなっています。

近年、宮若市ではAI開発拠点の整備など新たなまちづくりへの挑戦も進められています。一方で、どれだけ技術が進歩しても、まちの魅力をつくるのは「人」であり、人と人との繋がりであることは変わりません。私たちは、このパンまつりで培った経験を活かしながら、世代や立場を超えた交流の場づくりを続け、宮若市に関わるすべての人が「このまちが好きだ」と思える地域づくりに貢献していきたいと考えています。

小さな繋がりは、やがて大きな力になります。これからも自治労宮若市職員労働組合は、「繋がり」を合言葉に、人とまちを結ぶ活動を続けながら、誰もが笑顔で暮らせる宮若市の未来づくりに挑戦していきます。

「パンで繋がる人とまち」

その輪をさらに広げながら、私たちは宮若市の未来をつくっていききたいと思います。